

2016. 6. 1 (水)

## 日本・世界の中のエスニック・マイノリティと ポピュラー・カルチャー

西村正男

先ほど打樋先生からお話がありましたように、現在は「世界と出会う」という共通テーマでチャペルが行われています。私は中国に留学経験があり、中国語を教えているので話をするようにと選んでいただいたと思います。

多分、チャペルでお話するのは3回目になると思いますが、留学中についての話は以前に語った気がしますので、私はへそ曲がりですから今日はそれとは違う話をしようと思います。私は話がうまくなくて、あちこちに散らかりそうな気がするので、始まったばかりですが、いきなり結論を言おうと思います。

「世界と出会う」というテーマですけれども、今日は、日本国内に目を向けようと思っています。今日の結論は、次のようになります。日本国内にも実はさまざまな世界から来ている人がいて、さまざまなエスニシティや文化を持った人がいます。われわれはそれに向き合えないといけませんし、向き合うことによって多くのことが得られるのではないかということになります。

### 西村ゼミの変遷

もう5年以上、チャペルで話すことがな

くて、新しくなったチャペルで話すのは初めてだと思います。今日は私が関西学院大学に着任してからの話をしようと思いますが、早いもので着任して10年経って、今年で11年目になりました。

現在は「表象文化論B」という科目を秋学期に担当しています。これは今年からスタートした新カリキュラムでも同じですが、思い出すと私が着任した10年前は、今の前の前のカリキュラムでした。つまり、今の2年生以上のカリキュラムよりも、1つ前のカリキュラムが走っていた時期になります。そのときに私は講義科目を担当しておらず、基礎演習と中国語、研究演習だけを担当する教員でした。中国語を履修している人は知っていると思いますが、中国語は全学共通の教科書を使っていますし、時間割も全学で組んでいます。最近では社会学部の中国語の授業を3コマ担当していますが、着任した当時は社会学部の授業だけではなくて、他の学部の授業も担当しようということで、社会学部の中国語は1コマか、2コマしか担当していませんでした。

そうすると、社会学部の学生に名前が全然知られていない状態で、初年度は5人ぐらいゼミ生がいましたが、そこからはすごく苦戦して、次の年はゼミ生は1人でした。そ

これは前の年に私のゼミに来るはずでしたけれども、単位が足りなくてゼミに進めなかった人が懲りずに私のゼミに来てくれたもので、2年目のゼミは1対1でやりました。

3年目はどうなるかと思ったら、説明会すら1人も来てくれずゼミ生はゼロとなって、その状況がしばらく続きました。どうしてこのように苦戦をしたかという、名前が知られていない、顔も知られていないということが理由として大きいと思います。それに加えて、ゼミのテーマも関係していると思います。当時のゼミのテーマは、中国に関することは何を研究してもいい、とにかくどのような切り口でもいいから、中国を扱った研究をしてくださいというように設定していました。そうすると、日中関係もあまり良くなかったり、反日デモが起きたり、中国に興味を持ってくれる学生が全然いなくて、これは困ったと思いました。

そこで、現在では旧カリキュラムと呼んでいる、今の2年生以上のカリキュラムがスタートする頃、テーマを考え直そうと思い、その頃から「東アジアのポピュラー・カルチャー」というテーマでゼミを運営しています。

私はもともと中国文学が専門だったので、この大学に来る少し前から中国の流行音楽の研究を始めていて、それから、映画にも関心があって、「表象文化論 B」の授業でも映画の話を中心にしています。「東アジアのポピュラー・カルチャー」というテーマにしたらゼミ生が増えるのではないかと思ってテーマを変えてみたところ、思った通り徐々に学生も増えてきました。

超人気まではいきませんが、二次募集、あるいは、年によっては三次募集で定員

が埋まるころまではきました。今は講義も担当していて何百人も学生が来てくれるので、ようやく顔と名前が定着してきたと思います。

「東アジアのポピュラー・カルチャー」というテーマでゼミをやっていると、だんだんゼミ生も集まるようになってきて、近年は留学生も必ず毎年来てくれるようになっていました。今は中国人留学生だけですが、かつては韓国からの留学生もいました。

私たち外国語を教える教員は、ゼミを開くか開かないかを自分で決められるのですが、仕事が忙しくなったので、今年の3回生向けにはゼミを開きませんでした。すると偶然にも副学部長の仕事をいただいたので、開いていたら大変だったと思っています。

今の4回生のゼミには中国人留学生が2人います。それから、「東アジアのポピュラー・カルチャー」というテーマでゼミを開くと、K-POPが好き、韓流好きという学生が必ず集まってきますが、在日コリアンの朝鮮学校出身者が今の4回生も1人いますし、今年の3月に卒業したゼミ生にも1人いました。

それから、最近では「ダブル」と言い方もしますが、今のゼミ生の中には日本と韓国のいわゆる「ハーフ」の人が2人います。ゼミの中にもさまざまな国籍やエスニシティを持った人が集まるようになったと思います。

## 講義科目と異文化理解

講義の話もしますと、「表象文化論 B」という授業を担当しています。私はもともと中国の専門家で、幸い非常勤でもいろいろな大学に声を掛けていただいて、前期は大阪市立

大学で授業を担当していて、9月には集中講義で金沢大学に行って、後期には奈良女子大学で授業をすることになっています。

非常勤で呼んでもらう授業は、「中国文学特論」や「中国文化論」など、「中国」という言葉が頭につく授業ですけれども、ここ関学では「表象文化論」という授業で、何百人もの受講生諸君のうちには、当然中国にあまり関心がない学生もいます。

中国が専門なので中国の話がどうしても中心になりますが、いろいろな学生に興味を持ってほしいと思うと、中国文化を話すだけではなく、日本の中の中国、中国の中の日本など、日本との関係で授業を組み立てるということを意識的に授業でやっています。

今年はすでにシラバスを出してしまったので去年と同じ授業をしようと思っていますが、新カリキュラムがスタートしましたから、来年度からは講義の内容もガラッと変えようと思います。東アジアや中国だけにとどまらず、もう少し大きいいろいろな異文化の問題です。

例えば、西欧人が東洋をどのように描いているのか、あるいは、これは学部長の難波先生もすぐ調べていますけれども、日本映画の中で在日コリアンがどのように描かれているのか、中国から見た日本、日本から見た中国、韓国などいろいろあると思います。

異文化をどのように捉えるか。在日コリアンが在日コリアンや韓国のことを描いたり、自分を他者の目からもう一回、見つめ直すという作業が行われたりすることをもう少しゼミや講義でも考えようと思っています。

私は2018年度に留学する申請をしていますが、もし、6月の学部長会で認められたら、今の2回生向けのゼミも、1回生向けのゼ

ミも開かないことになり、少し間が空いてしまうのですが、ゼミのテーマも他者の問題を考えるテーマ設定をしようと考えているところです。

「東アジアのポピュラー・カルチャー」というテーマでゼミをしていますが、私のゼミではフィールドワークというかっこいい言葉を使わずに「遠足」と呼んでいますけれども、毎年、神戸の中国ゆかりの場所を巡る「遠足」をしています。

そうすると、面白いのですが、この前、遠足をしたときに阪急神戸三宮駅の西口で待ち合わせをしていたら、偶然、韓国人観光客が道を聞いてきました。うちのゼミには朝鮮学校出身の学生がいるので、すぐ朝鮮語で道を案内しました。

それから、関帝廟という中国人のための関羽を祭ったお寺があります。そこに参拝に行くと、その近くには中華同文学校という中華系の学校があり、その卒業生が中国語でお祈りをしていたので、中国人留学生はその人と中国語で会話をしました。南京町に行った後に神戸華僑歴史博物館という華僑の博物館に行って、館長さんとも留学生は中国語で会話をしたりしました。このようにゼミの中でもいろいろな文化を持った人たちがいることをそのような活動を通じて体感してもらっています。

## ポピュラー・カルチャーにおける他者問題

今のゼミの中でも紹介をしていますが、「東アジアのポピュラー・カルチャー」というゼミのテーマのうち、他者の問題は「東アジア」に関連するだけではなく、東アジア以

外の「ポピュラー・カルチャー」においてもいろいろな他者が描かれます。今の若い人はあまり昔のロックを聴かないかもしれませんが、打樋先生もロックが大好きですけれども、私もロックが好きで、1970年代、1980年代に活躍したクイーンというロックバンドをゼミの中でいつも紹介します。

1989年にフレディ・マーキュリーというボーカリストが亡くなりました。そのグループの「ボヘミアン・ラブソディー」という代表曲がありますけれども、NHKが『ボヘミアン・ラブソディー殺人事件』という番組を作りました。それを授業やゼミで紹介しています。

「ボヘミアン・ラブソディー」という曲は6分ぐらいある複雑な曲で、何が言いたいのかよく分からない曲ですが、「お母さん、人を殺してしまった」という歌詞から始まる不思議な曲です。その曲は一体、どのようなことなのだろう、何を殺したのだろうというテーマ設定で番組が作られていて、いろいろな角度から分析します。

イギリスのロックバンドでもあり、クイーンは女王という意味ですし、フレディ・マーキュリーはイギリス人だと思われていましたが、実はザンジバル生まれで、しかもルーツはインド人で、インドの中でもパールシーと呼ばれるエスニックグループに属していることが番組では紹介されます。

パールシーという音からしても分かるように、ベルシャ系といわれているゾロアスター教徒の集団の一員だったということです。彼はエスニック・マイノリティに属していて、なおかつ、セクシャル・マイノリティでもありました。彼は同性愛者であり、エイズで亡

くなったのです。

それは1つの解釈にしすぎませんが、1つの見方からすると、ゾロアスター教の教えに反して同性愛者として生きていて、そのような自分の存在を歌った歌ではないかというのが番組の解釈として示されていました。

そのようなポピュラー・カルチャーを考えると、エスニシティや宗教、あるいは、セクシャリティの問題がその曲には凝縮しているのではないかと、ゼミ生にも考えてもらっていますし、今後は講義の中でもその問題を扱おうと思います。

私は中国研究者ですが、最近には日本に絡めた研究もしており、日本の華僑の音楽活動として、1冊の本にまとめたいと思っています。華僑の中でも、例えば、高中正義という有名なギタリストがいますが、最近、『徹子の部屋』や日本経済新聞のインタビューなどで、お父さんが中国人で、小学校の四年生までは劉正義という名前だったと明らかにしています。

彼が所属していたサディスティック・ミカ・バンドの「ファンキー MAHJANG」という曲は、高中の父が中国人で雀荘を経営していたことの反映と見ることもできるし、高中が自分のソロ名義の楽曲として「チャイナ」という曲を作るなど、中国系を意識しながら音楽活動をしていることが見えてきます。

そのような日本の中、あるいは、外国の中のエスニック・マイノリティという問題は、ポピュラー・カルチャーを考える上でもすごく重要なのではないかと考えています。時間がきましたので、今日のお話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

(社会学部教授)